

## 第5回 九州圏広域地方計画有識者会議(令和6年3月15日開催) 議事概要

### ■議事 (1)第4回有識者会議でいただいた意見について

- 今後のスケジュールについて、中間とりまとめが令和6年冬頃予定されているということだが、今回の第4回有識者会議はどのような位置づけなのか、ご説明いただきたい。
  - ⇒ 中間とりまとめ公表を令和6年冬頃としているが、今回の有識者会議までで、全国計画の重点テーマについてご意見を伺う。次回は中間とりまとめについて説明させていただき、またご意見をいただく機会を設けたいと思っている。
- 将来像と目標に付けた副題について、事務局の想いがあれば伺いたい。
  - ⇒ 前回の会議にて「将来像や目標の内容をわかりやすく表現し、インパクトがあるような言葉を追加した方が良いのでは」とのご指摘があったため、「世界が憧れる地域へ」などを考えたが、やはり九州を入れた方が良いという思いと、九州というだけでなく「シン・九州」のようなものの方が目を引くのではという思いがあり仮でつけさせていただいた。
    - 目標1については、トランスフォーメーションのX、交流・クロスのXなどいろいろな意味があり、Xと言ってもなかなか伝わりづらいため、「交流と変化を競争力へ」という言葉を入れている。目標2は、自立的広域連携「アイランド九州」はわかりづらいところもあるので、「快適で幸福な暮らしへ」というわかりやすい副題をつけている。目標3は「強く美しいアイランド九州」として完結した言葉ではあるため、足すとすれば「強靱でグリーンな社会へ」と思っつけている。
- 副題はあった方がいいと思う。
- 「シン・九州」は確かに面白いタイトルだと思うが、今の流行りということもあり、しばらく経った時になぜあんな言葉選んだのだということになりかねない。その点「ONE九州」という言葉は、九州が一つという形でいろんな活動をされていることもあるし、言葉として受け入れやすいと感じる。「ONE九州」であげた方がいいのではないかと思う。
- 「ONE九州」にすると、「ONE九州」が持っているコンテンツに引きずられるところもあるので、そのまま「ONE」を使えないということもあると思う。工夫が必要。また、目標3のタイトル「強く美しい」と副題「強靱な」の「強い」という言葉が重なっているのも、もう少し検討してほしい。
- 「シン・九州」という言葉は非常に魅力的だと思うが、具体的に「シン」と言った時に世の中でのいろいろ「シン・なんとか」という言葉使われているが、仮に「シン・九州」とした場合の「シン」に込める概念というのをどのように考えたらいいいのか。共通認識を持っていたほうがいいのかと思う。例えば、新しいの「新」、深まっていくの「深」、信頼の「信」などいろいろあると思うが、事務局としてはどういう思いで「シン」という言葉を使うのか、教えていただきたい。
  - ⇒「新」や進んでいくの「進」、そういったものをイメージしながら、「シン」という言葉を使っている。「深」というイメージはあまりなかったが、「深い九州」いい言葉だと思う。作成時は熟議し、何を意味するのかという指摘があった時に答えられるネーミングを考えていきたい。
  - ⇒「シン・九州」の部分で、九州は一つというのを体現するのであれば、「ONE九州」がそのまま説明していて、わかりやすい。その場合、「ONE九州」の表記だが、アルファベットの「ONEKYUSHU」という言葉を入れるのであれば、仮に海外の人に今後説明する機会がある

際に、「ONEKYUSHU」をキーワードにして、アピールするというのを見据えて、そういう言葉を入れてもいいのかと思った。

⇒「世界から憧れる九州へ」ではなく、何かしらの副題があった方が良さそうな感じである。思いとしては「ONE」とか「シン」というところで、皆さん一緒だと思うのもう一工夫検討をお願いする。

#### ■議事 (2)重点テーマについて

##### ①「持続可能な産業への構造転換」、②「人口減少下の国土利用・管理」について

○ 土地改良区の問題というのと、その中で分散している小さな土地を併せて大規模化するという話について、大規模化するあるいは大きな法人が農業の担い手になっていくと農家の数としては減るということか。

⇒ 農家数ということでは減る。

○ 農業を効率的にするという意味では優れたことだと思うが、水の管理や土地改良区に関連づけて考えると、土地改良区のメンバーも数自体は減っている。あるいは大きな企業だと経営などの心配もあるかと思う。

⇒ 例えば、土地改良区に関し、一般社団法人への移行など、管理面での課題を解決・改善するため、いろんな検討がなされている。土地改良区の一般社団法人化によって、効率的な活動を促すというような議論が行われている。

○ 全国計画の中に入っているシュタットベルケみたいなものとの関係しそうだが、土地改良区を一般社団法人化すると、農業系の法律で縛られるのか、6次産業などでの地域経営と農業の生産法人がミックスするなど、多様な形で展開する法律の枠組みとなるのか。

⇒ 後ほど確認をして情報提供させていただく。

○ 人がいないなかで地域が自立するためには、農業だろうが、交通だろうが、いろいろなものがミックスされる場所は、九州で特に考えていけないといけないと思う。農地が大きく経済化できる場所は、まだ法人化の余地があるが、棚田とか山間部の方の農林業については、生産効率が非常に悪いので、法人化が厳しいかと思う。条件の厳しいところの農業については国の中の方針と絡めて何かあるのか。

棚田を守るとか山林を守るとか山間部の農地を守るということについて、特に九州では大事な問題だと思う。

⇒ 中山間地の直接支払いという制度があり、傾斜地に応じて、国等が直接、補助金を出して、集落全体で維持していくといった取組をやっているところがある。

⇒ 今の質問に関連して、先ほど法人化と半農半Xの両輪で考えるというのがあるけれども、恐らく条件が不利なところは半農半Xに力を入れる可能性が高いと思う。半農半Xを強化・支援していくという方法はどのようなものがあるのか。

⇒例えば、労働力確保の面で言えば、マッチングアプリを使った労働力のマッチングがある。

○ 本日議論いただきたいことの中で、九州圏が日本の食料安全保障の観点から果たすべき役割とあるが、農業競争力を高めることと、九州からの輸出を増やすという2点があると思う。九州

圏広域地方計画においては輸出の強化は含まれるのか。

⇒含んでいる。持続可能な産業という観点で、稼ぐ力を伸ばすことも重要であるため、含めてご議論いただきたい。

⇒競争力を高めるための基盤整備が必要。

- フラッグシップ輸出産地を作るということが記載されており、全国で 50 箇所程度選定とあるが、九州ではどの産地がどの品目で認定されるのか。

⇒確認する。

- スマート農業のところで農地集約化の話がされていたが、農地集約化はいろいろな問題がある。次の議論となる人口減少下の国土利用・管理にも関係しているが、集約化は流動化がカギである。集約化は、一生懸命されているが、産地が強くなれば、その次の段階として国内各地への物流へと課題が移り、場合によっては輸出するようになっていくと思うので、ここを国土形成計画にどのように入れていくのかの話にもなるのかなと思っている。農地集約化については、比較的九州は進んでいる方だと理解しており、熊本、鹿児島、宮崎などが大産地になって、より一層日本全体の食料供給基地になっている印象がある。その点を計画にしっかり入れていくことが必要だと思っている。さらに平時の時だけではなく、有事の際にも全国各地へ届けられるよう、基盤をしっかり作らないといけないという理解。食料の安全保障を考えた際に、九州だけの狭い話ではない。全国の産地への産地間連携の話もあるし、場合によっては海外の生産地との連携のようなものもある。例えば南半球のオーストラリアとかニュージーランドは日本とは季節が逆である。そこを産地で連動している商品もある。そのため、食料安全保障のためには国際連携も大事だという話になり、連携をつなぐためのインフラも大事だと思う。

⇒例えばキウイフルーツだと、ニュージーランドが産地であり、南半球で取れる時期と北半球取れる時期がうまく合わさると一年中供給できる。キウイのゼスプリという世界的なメーカーが日本の産地とも契約して栽培している。

⇒キウイは九州が主産地になっており、まだ足りないということで土地を探されている。場合によっては日本とニュージーランドが連携して、個別の地域に輸出することになることもある。そういったものに対応していくことが安全保障には必要かと思う。

- 土地改良区の維持が難しい中で、あり方を変えていこうとしていると思うが、時代にあった形になっていっていると理解してよいか。

また持続可能というか、稼ぐための政策が増えていく一方で、集落の維持といった今あるものを維持していくということに、日が当たらないのではないかと思う面がある。九州は集落の維持が難しくなっていく中で、稼ぐということと同時に両方いるのではと思う。

⇒農村 RMO など地域コミュニティを維持していくための施策も実施している。

- 人なり組織なりの問題を九州としてどのようにクローズアップして計画を作っていくのが重要。中山間地域について農業だけではなく、多様なやり方で支えていくことが九州にとって大事。デジタルについては災害だけではなく、森林の管理などにおいても重要。

## ■議事 (2)重点テーマについて

### ③ グリーン国土の創造

- 今回議論いただきたいことにある九州圏においてカーボンニュートラルへ向けた取り組みといった大きな話をする時には、産業界から出る問題に取り組む必要がある。例えば、運輸業において脱炭素は非常に重要な問題。2024年問題でモーダルシフトという問題に加え、九州は陸運と同時に海運にも頼っている。例えば、別府と関西の間のフェリーが水素で走るようになっているが、残念ながら別府港には水素の燃料を供給している施設がない。また自動車船やコンテナ船についても水素エンジンあるいはアンモニアが出てきたが、九州では全く対応されていない。カーボンニュートラルに向けた取り組みを考える際には、産業界ではどうあるべきか議論をしていかなければならないと思うが、事務局としての考えを伺いたい。

⇒大きな観点でのご議論、ご意見もいただきたいというところ。地域生活圏の形成とも重なるところ部分もあると思うため、地域ベースの細かな取り組みを重ねていくといったところへの視点、両方を今回の議論の対象としていただきたいと考えている。

⇒九州地方環境事務所としては、地域づくりに主眼を置いている一方で、産業の対策も当然ながら進める必要があると思っている。九州経済産業局や九州運輸局と議論もしており、産業部門については、大分のコンビナートではグリーンコンビナートの推進といった計画もあるため、足並み揃えながら進める必要があると思っている。課題としては、九州は日照条件が良いということもあり、太陽光発電が盛んであるが、一方で、出力制御により再生可能エネルギーが余っているといった現状もあり、マクロな視点といったところも検討していかなければならないと思っている。

⇒グリーン国土という意味では運輸や経済、環境を含めて、横断的なものになる。その中で大きいものから、地域生活圏まで、それぞれ計画には記述をしていくということになるということだと思う。

- 長崎県五島の北部に宇久島というところがあり、島の1割の陸地を使ったメガソーラーを今年の春頃着工を予定されている。住民の方々が生態系に与える影響や、海底ケーブルによる漁業に対する影響を心配している。カーボンニュートラルを進めることによって生態系が崩れてしまう可能性があるとするれば、本末転倒のような気がするため、バランスよく進めていくために環境アセスメントによって、地域全体の合意を測ることが必要だと思うが、再生エネルギーの装置を作るといった場合、環境アセスメントの進め方はどのように進めるのか。

⇒カーボンニュートラルを進めることによって他のところを踏み倒していくことは望ましくない。アセスメントについては、メガソーラーも対象になっており、事業の実施前にアセスを実施し、発電所の場合は、経済産業大臣の勧告を踏まえ、事業実施をしていただくといったようなプロセスになる。

⇒ソーラー発電の問題は有識者会議が始まって何回も出ているが、最近、また風車といったことも色々話題になっている。どこかで必ず環境に配慮したという形の新しい再生可能エネルギーという書きぶりは計画に踏まえる必要がある。

- ゼロカーボンエネルギーの話について、TSMCなど大型半導体工場の立地で電力需要が増

えるなか、火力発電所を動かせば電力供給はできるけれどもCO2排出量が増える。それに対するゼロカーボンエネルギー転換をどうするかという問題がある。その中で、風車というのは一つの解決策であり、北九州とか五島とか風向がいいところがあるため、九州全体でゼロカーボンエネルギーを供給できるような体制が必要。

一方で、太陽光はすでに出力制限されているため、地域間と連携して使うことを計画へ記載しても良いと思う。

- 水源や温泉についても九州にとっては非常に大きな魅力であることから、水源や温泉の保全についても同時に考えるべき。自然環境の部分だけでなく水源や温泉というのも九州ならではの思う。

⇒熊本のTSMCのところでも地下水の話があったが、地下水なり温泉なりといった水資源についても考える必要がある。

- 自然再生エネルギーの活用という発想自体はとても良いことだと思うが、運用の仕方については、大きな企業が担うだけでなく、地元の集落や地域レベルでエネルギーを自給するといった、効率が悪いかもしれないけれども、地域の人たちが自分たちの利益になるような仕組みを考えることが、九州にとって重要。

- 獣害が農林業を続けていくうえで負担になっている現実がある。日本全国どこでも悩み抱えていると思うが、少し気をつけておくべき。

⇒鳥獣被害対策というのは、農林業を進めるうえで非常に大切なこと。農林水産省あげて取り組んではいるが、高齢化と人口減少という部分で進んでいない状況。

以上